

ウィリアム・ヘフアーナン

友枝康子 訳

殺しの儀式

RITUAL

by WILLIAM HEFFERNAN

新潮文庫

Title : RITUAL

Author : William Heffernan

Copyright © 1988 by William Heffernan

Japanese language paperback rights arranged
with New American Library, New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ころ ぎ しき
殺しの儀式

新潮文庫



へ - 9 - 1

Published 1992 in Japan
by Shinchosha Company

平成四年五月二十五日発行

訳者 友枝康子
とも えだ やすこ

発行者 佐藤亮一
さとう へいいち

発行所 株式会社 新潮社
しんしょうしゃ

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・三晃印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社
© Yasuko Tomoeda 1992 Printed in Japan

ISBN4-10-237801-4 C0197

江苏工业学院图书馆

蔵し書の章式

ライオン・メソヂニチン

友枝康子 訳



新潮社 版

4870

殺
し
の
儀
式

主要登場人物

ケイト・シルヴァーマン	アメリカ自然史博物館研究員
グレース・マロリー	ケイトの上司
マルカム・スージ	マロリーの助手
エズラ・ウォーターズ	アメリカ自然史博物館警備責任者
アレクサンドラ・ロス	メトロポリタン美術館研究員
ジョージ・ウィルコックス	同 学芸員
ジョゼフ・ロバト	聖ヘレナ教会のカトリック神父
ホワン・ドミンゴ	ロバト神父が密入国させたマヤ・インディオ
ロベルト・カリエント	同 マヤ・インディオ
スタニスラウス・ローク	ニューヨーク市警警部補
ポール・デヴリン	同 刑事 ロークの部下
チャーリー・モリアーティ	同 刑事 同
バーニー・ピーターズ	同 刑事 同
ジェリー・フェルドマン	同 検屍官補
ネイサン・グリーンズパン	同 嘱託精神科医
ジェームズ・ダン	同 副本部長 ロークの上司

謝辞

モーリン・バロンとグローリア・ルミスに、そしてことに、骨身を惜しまずにタイプを打って元気づけてくれたステーシー・ブレークに感謝する。

書籍について知らぬことのない、

そして友情についてはさらによく知っている

ラリー・フロイントリッヒに。ロレンゾに感謝を。

プロローグ

十一月九日 午後八時十五分

まだ曲のついていない子守歌のような、やさしく心地よいその声は聴衆の頭上を穏やかに流れ、話の主旨とは相容れ^{あひい}ない感があつた。

「思い描いていただきたいことがあります。みなさんの善悪の概念、つまり何を善とし何を悪とするかという基本的な理解に一石を投ずるようなことです。

「ご自身が七百年以上昔のキンタナ・ローのジャングルのなかに立っていると想像してください。あなたがたはそこで、何世紀にもわたって繰り返されたトルテカ族の儀式をまのあたりに見ているのです。学者のなかには、その儀式を人間の蛮行と評する人もいれば、崇高な愛の行為と見る人もいます。ともあれ、あなたがたはいまそこにおいて、儀式の行列があなたの前を通ろうとしているのです。夜明けの霧がジャングルの地表からたちのぼり、濃くたちこめて、行列の通る道を煙^{けむ}らせています。

「行列には三人の神官がいます。羽根飾りのついたそろいの長いローブをまとい、小道を歩

むにつれて赤、青、緑の玉虫色の羽根が明け方の光を受けてきらめきます。神官はそれぞれ石の仮面を革紐で首にかけ、腰には緑色の刀身の長いナイフを差しています。

「神官につづく四番目の男は腰布一枚の姿で、複雑な彫刻をほどこした青銅の斧を頭上高くかかげています。そのうしろでは二人の男が、裸身の女の手首をしばった縄のはしを持ち、女は二人にはさまれて誇らしげに歩いています。」

「周囲のジャングルは静まりかえり、鳥や猿も暗緑色の木々の葉叢にひそんでいます。微風さえとまったかのように、突然の嵐の前のように空気はどんよりとしています。」

「行列が林間の広い空地に近づき、石のピラミッドが前方に姿を現わします。その高さは優に二百フィートはあり、まわりのジャングルも小さく見えるほどです。ピラミッドの下には数百人が晴着をまとって集まり、神官たちが近づいてくると、人間の鼓動のように単調な拍子をきざむ詠唱が低く流れはじめます。」

「ゆっくりと、莊嚴に行列はピラミッドの正面を登り、頂上の平らなところに達します。そこには中央に三角の石が置かれてるだけです。神官と斧を持った男がそれぞれ要の位置につくと、女をとらえている二人の男がその体をかえ上げ、三角の石の真上で宙に支えます。」「ピラミッドの下では詠唱がしだいに高まり、やがてぱったりととまります。神官はそれぞれ石の仮面をつけ、腰の黒曜石の長いナイフをゆっくりと抜きます。」

「時がきました。これでいけにえを捧げることができるようです。なんら罪悪感をともなわぬ、尊嚴と愛のみを表わす究極の行為です。」

* * *

十一月九日 午後六時三十分

ロークはちょっと目を上げ、オフィスに入ってきたデヴリンを見ると、ふたたび机上に散らばっている書類の仕分けをはじめた。「今夜ロレンゾを挙げてもらいたい」ロークは言った。「ここへしょっぱいて妻を殺害のかどで調書をとるんだ。モリアーティとピーターズを連れて行け」

「警部補は行かないんですか？」とデヴリンがきいた。

「いや。なぜだね？」

「あの事件を解明したのは警部補ですからね。行きたいんじゃないかと、ちょっと思ったもので」

「ほかの予定があるんでね。メトロポリタン美術館へ講演を聴きに行くんだ」

「またですか？ 今度のはなんですか？」

ロークは目を上げて、にやにやしているデヴリンの顔をのぞきこむ。「トルテカの儀式についてだ」デヴリンをにらみつけた。「そうさ、また殺人の話だよ」ロークは椅子の背にもたれた。「どうした？ あのポルノ・スターはおまえひとりじゃ手こずると思っているのか？」

デヴリンのにやにや笑いは顔中に広がった。「なんなら警部補がスーパースターと一夜を過ごして、わたしが講演のほうに出かけたらどうかと、ちょっとね。案外わたしにもいい勉強になるかもしれません」

ロークは自分もにやにやしそうになるのをぐっとおさえた。「言われたとおりにするんだ。ときにはそいともいい勉強になるよ」

「ロレンゾを有罪にするだけの証拠がそろっていると思いますか？」

ロークは机に腕をのせて、背を丸めるように身を乗り出した。「やつはポルノの大スターだが、麻薬売買で前科がひとつある。妻は良家の金持ちの娘でほしいものなんでも買ってもらっていた。ところがその彼女、ロレンゾと会ってからは、自分がほんとうにほしいのは、セックスにおぼれることと麻薬を打つことだと思ひこんだんだ。あのオッチョコチョイを拘留するのに証拠はたくさんいらないうさ。被害者が裕福で有名な家の出でなかったら、この事件はわれわれのほうにはまわってもこなかっただろうさ。所轄の刑事が担当して、われわれが今やろうとしているとおりのことをしていただろう——一週間前にな。そのうえにな、ロレンゾには腕利きの弁護士がつくだろうし、地方検事補にしてみれば彼が有罪であろうとなかろうと、どっちでもいいんだ。大事なことは、自分の実績にもう一つ有罪判決をふやすことだけだろうから、軽い求刑をするのと引き換えに有罪を認めさせるだろう。ロレンゾは五年の刑を食らって、出てきたらまたカメラの前でズボンをおろすだろうさ」ロークは机に視線を落としてまた書類をあちこち動かしはじめた。「現実的に処理すればいいんだ。有罪

か無罪かなんて考えないで、事件を片づけてしまうことだ。仕事とはそんなもんだよ」

* * *

十一月九日 午後九時三十五分

シンシア・ゴルトは頬を小道に押しつけられていたが、その冷たさもざらつきも皮膚に感じなかった。身動きしようとしたが、体がまったくいうことをきかない。脚も腕も消え失せてしまったみたいだ。目だけは見えるので、自分がどこにいるのかはわかった。なにか言おうとしたが、唇をついて出るのは激しいあえぎだけだった。

次に彼女の体は小道を横切って芝生に引きずりこまれた。低い常緑樹の枝々が目をかすつたが、彼女はもう目を閉じることができなかった。動きがとまり、体の向きを変えられ、葉叢が万華鏡のようにさあつと彼女の視線をよぎった。彼女は仰向けにさせられた。

四方に視線を投げて、自分の身になにが起こったかを知る手がかりをさがした。なにかに襲われたのはまちがいがなかった。そのあと人目につかない場所へ引きずっていかれた。だが引きずった人間はどこにいるのだろう、それになぜ感覚がなにもないのだろうか？

人影が彼女の上にぼうつと立ち現われた。シンシアは声をたてようと懸命になったが、喉がつまった。頭の横にブリーフケースが置かれ、なかからビニールのレインコートが取り出された。彼女は視線をふたたび自分の体の上に浮かび上がる人影に向けた。レインコートが

黒っぽいトップコートの上に、堂々とさえいえるほどゆったりとはおられるのを、信じられない思いで眺めた。

両手がふたたびブリーフケースに突っ込まれた。シンシアがじっと見つめていると、長い緑色の刀身のナイフがゆっくりと取り出された。大昔のもののような。映画に出てくるような、それとも……彼女は一瞬ぞっとした。それとも、美術館にあるような。彼女はあえぎ、なにか言おうとしたが、どうしても声が出ない。人影は彼女の上にかがみこみ、両手でコートのボタンをはずし、ブラウスのボタンもはずした。服が脱がされ、疊まれてブリーフケースの横にきちんと置かれるのを、彼女はおびえながら見ていた。

はだかにされたが、寒さは感じなかった。つのる恐怖にかられながら、人影の顔が石の仮面に変わるのを見ていた。はげしく息をのむかすかな音がした。吐く息は仮面にさえぎられてやっと聞こえるほど低い。人影が彼女にまたがり、仮面は彼女の顔に向けて傾き、息づかいが大きくなった。仮面の下の目は穏やかでうっとりしているようだ。仮面の石の口さえ曲線を描いて、甘いといってもいいほど穏やかな微笑を浮かべているかに見えた。手袋をはめた手が彼女の顔の上でナイフを振りかざすと、ゆっくりと下りてきた。叫び、懇願しようとい。あがくシンシアの頬に涙が流れた。言葉は頭を駆けめぐったが、唇からは一言ももれてこない。

「お前は先ぶれにすぎぬ」やさしい声がささやいた。

ナイフがさらに下りて、シンシア・ゴルトは、きざむような素早いその動きを見ていた。

鮮血が突如噴水のようにほとぼしり、彼女の上にかがみこんでいる人影にはねかかった。血は何度も噴き出し、彼女はじっとそれを見つめながら、なにが起こっているのかを理解しようとした。やがて彼女の視界はおぼろになりはじめた。はじめはゆっくりと、しかししだいに早さを増しながら。やがてかすかにごぼごぼという音と、遠くから聞こえてくるような規則正しい息づかいだけの世界となった。

* * *

十一月九日 午後七時四十五分

長い、つややかな捕食性動物の列のようにリムジンが五番街に連なって、次々に着飾ったカップルをメトロポリタン美術館の広い石段の前で吐き出す順番を待っていた。時おりタクシーが列の先頭に割りこみ、同じように着飾った客を降ろした。すでに次の料金のことが頭にある運転手は、ずうずうしくも順番を守ろうとしないのだった。

照明の明るい階段のあちこちで、裕福な暮しを物語る日焼けした顔のカップル同士が立ち話をしていた。数日後の行事の話をしている人もあれば、これから聴く珍しい講演について静かに語り合っている人々もいた。頭上には長方形の横断幕が張っており、展覧会の予告が出ていた。「人身供儀にはほえむ神々」今日の講演はその紹介をかねていた。

* * *

十一月九日 午後七時三十分

女性が二人けんか腰で向き合い、中年のカトリックの神父が二人をかわるがわる見つめていた。彼は不安げな、あっけにとられた表情を隠そうとしない。

「あなたはこの展覧会をショービジネス化しようとしているのよ。それじゃ失敗するわ」グレース・マロリーは唇をきゅつと真一文字に結んだ。声はうまく抑えてはいたが、その目は、わが子を守ろうとする母のようにけわしく光っていた。

非難されたケイト・シルヴァーマンは背をこわばらせた。「うまくいくようにと思ってやっているのですのよ、グレース。展覧会に人が集まるようにと」

「でも、そのことでわたしたちが奨学金の資格を取り上げられたら、それは仕方のないことだし、結果として残念なことになるわ」

神父はあいかわらず二人を見やりながら、彼女たちの闘志満々の目の色と対照的な穏やかな声音にとまどっていた。

「あなたにとってもそうでしょうけど、奨学金はわたしにとっても貴重なんです、それはわかりですよね」とケイトは答えた。「奨学金は経済的に必要な状況があれば存続しますわ。でも、もしも美術館に人が集まらなかったら、わたしたちは失業するんですよ」

グレース・マロリーは年下のケイトに嘲笑ちやうしょうを浮かべて見せた。「だからあなたはトルテカのいけにえの儀式というばかばかしい講演を考え出して、キンタナ・ローからきた貧しいマヤ・インディオの難民を救済しようという、感動的なロバト神父の活動の基金集めの行事にしようというわけね」

「そのとおりです」ケイトの口調がはじめてけわしくなった。「そうすれば財界から後援者を引き入れることができますわ。そういう人たちが参加するのは、この行事が二つの点で彼らの要求をみたしているからです。恵まれた自分たちの生活の安全をそこなうことなく、奇怪でおそろしいものに触れることができます。そのうえ財布の紐ひもをゆるめて、しいたげられた人たちを援助することができなのです。罪悪感をなだめる役を果たすわけです。マヤ族とウバンギ族の違いを知らなくてもどうということはありません。この計画はうまくいきますわ」

グレース・マロリーが反論しかけたが、ケイトは片手を上げてそれをばんだ。「それに『ニューヨーク・タイムズ』の明日の朝刊にトランプ夫妻、キッシンジャー夫妻、ロハティン夫妻、州知事その他のお歴々が来館したという記事が出れば、展覧会の初日には通りには幾重にも列ができるでしょう。大衆は大金持ちや権力者のあとにつづきたがるものですから自分たちも彼らと同じことに関心を持っていると思いたいものですもの。それも役に立ちますわ」

「そうですよ、グレース、非常に役立ちますよ」とロバト神父がはじめて言葉をはさんだが、